



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

<http://www.purple.dti.ne.jp/sangenjayachurch/>

三軒茶屋 教会通り

第32号 2008年4月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋 1-31-5
TEL/FAX: 03-3418-4933
発行: 三軒茶屋教会 広報部

春はいのちを考えるのにふさわしい季節です。すべてがまぶしく輝き、いのちあることの喜びを感じられるときだからです。聖書には「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」（創世記二ノ七）とあり、私たちのいのちは神によって生かされていることを教えています。すなわち一人ひとりの今生きている生涯は、神から預かったものと考えなければなりません。そこに与えられた特性と能力を活用して生きるべきとき、私たちがただ懸念に生きていくかだけを、神は問うのであります。

価値あるいのち

牧師 陣内厚生

しかし、世を生きる私たちには、いのちの価値を考えると、現代社会の魔物のような力が私たちに焦燥感と亡命意識に陥らせてはいないでしょうか。私たちの周辺には、このような不安と不信、孤独と悲哀が漂っており、魂の休まる所がないのです。このような状況から、真の喜びへの扉、いのちの息吹きを感じ得る道は見つかるのでしょうか。太宰治の「走れメロス」を思い出します。中学校の教科書にも載っています。

この話は、興味深い問題を提起しています。主人公メロスは妹の結婚式の買い物に出かけた街で、王の横暴を知る。無実の人が殺されているのに怒ったメロスは、王を殺そうとして宮殿に忍び込み、死刑を宣告される。メロスは妹の結婚式がすむまで三日の延長を願い出、その人質として親友をさし出す。結婚式が終わって、親友を犠牲にはできぬ、とメロスは走り去って処刑場に向かう。「私は今宵殺される。殺される



と孤独に悩みながらも、絶対信頼の対象のイメージを求めていたのではないかと思われます。「信じられていないから走る」と言いながら、「信じていてくれる者」が究極には、だからであるか、太宰の生涯では掴めなかつたと思えます。

私たちのいのちにとって本当に大切なことは、このいのちと人格を「信じて愛してくれている存在」があるということです。聖書にはイエスの数々の言葉の中に、私たちが最もよく受け入れてくださっている事例があります。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マルコ二ノ一七）。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」（マルコ一〇ノ四五）。まさに私たちのいのちを守るために、イエスご自身があの十字架の死をとげられました。また復活により永遠のいのちを約束されました。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」（ヨハネ一ノ二五）と。